

<書評>

李正連著

『植民地朝鮮における不就学者の学び—夜学経験者のオーラル・ヒストリーをもとに—』

博英社 2022年4月

肥後耕生（豊岡短期大学）

本書は、植民地期朝鮮において、多くの不就学者の学びを担った夜学に着目し、当時（1930～1940年代）の夜学経験者の証言（オーラル・ヒストリー）をもとに、従来の研究では十分に明らかにできていない夜学の実相に迫っている。植民地期朝鮮における朝鮮総督府の教育政策や私設教育機関に対する統制によって生まれた不就学者が夜学に何を求め、ここではどのような学びが行われていたのか、実際に夜学で学んだ人びとの視点から当時の夜学の実態を描くとともに、不就学者にとって夜学が果たした役割とはいかなるものであったのかを明らかにしている。

本書の構成と内容は、以下の通りである。

まず序章「朝鮮民衆の教育欲求は満たされたのか」では、先行研究の検討と本書の課題について取り上げている。著者は、夜学に関する従来の研究に対して、「主に「抑圧—抵抗」という二項対立の研究視点や、朝鮮民衆の民族教育の場として捉える視点が強く、民衆自らが生活向上や教育欲求に基づいて教育や学びをつくりだす教育の主体という側面が看過されやすい点、また当時の新聞や雑誌など限られた文献資料のみを用いた研究が大半を占め、それでは夜学の全貌が明らかにできない」（pp.10-11）ことを指摘している。そこで著者は、夜学の実態を具体的に描き出すために、当時の夜学経験者の証言（オーラル・ヒストリー）を用いることを方法論として示している。

第1章「植民地朝鮮における教育政策の展開」では、植民地期朝鮮における教育政策の展開過程について検討している。朝鮮総督府の教育政策は、三・一独立運動後に高まった朝鮮民衆の教育欲求を満たすための教育機関の増設に消極的であった。一方で、私設教育機関の教育活動を統制し、「学校を中心とする社会教育」や「卒業生指導」といった社会教育施策が展開されていて、その過程を明らかにしている。

第2章「教育欲求の高まりと夜学の増加」では、朝鮮総督府の消極的な教育政策が行われるなか、朝鮮民衆は自分たちの教育欲求を満たすために諦めることなく、学校増設運動や農村啓蒙運動などを展開する。そのなかで、朝鮮民衆、とりわけ多くの不就学者に学ぶ機会を提供した夜学に注目し、夜学の類型、設立主体及び目的、教育内容、運営状況、民衆教育運動との関係について検討している。

第3章「不就学者の学びの実態—1930～40年代夜学経験者のオーラル・ヒストリーをもとに」では、植民地朝鮮期における「不就学者の学び舎」としての機能を担った夜学の具体的な実態について、1930～1940年代の夜学経験者（生徒と教師）64名のオーラル・ヒストリーをもとに描き出している。

第4章「女性の学びと夜学」では、植民地期朝鮮人女性の不就学状況と朝鮮総督府による女子教育政策、女子教育に対する関心の高まりとともに、女子教育の多くを夜学が担っていたことを明らかにしている。その上で、1930～1940年代の夜学経験者のうち、女性のオーラル・ヒストリーをもとに、当時の女性の生活と学びの実態を描き出している。

第5章「夜学教師による教育実践の諸相」では、当時の夜学教師による教育実践の実態について、4名の教師経験者を含む夜学経験者のオーラル・ヒストリーをもとに描き出している。なかでも、夜学教師を担った契機、教育内容、夜学教師としての思いや生徒との関係など、当時の夜学教師の教育実践と特徴について、夜学教師経験者の証言をもとに明らかにしている。

終章「不就学者の学びと夜学」では、夜学経験者のオーラル・ヒストリーをもとに、学ぶ側の視点から夜学の実態を明らかにし、検討することによって、従来の文献資料だけに頼った研究では見出すことができなかった植民地期朝鮮における不就学者にとっての夜学とはどのような場であったのかについて整理している。

従来の研究では明らかにできていない、また新聞や雑誌等の文献資料だけでは読み取れない夜学の教育実践の実態を、当時の夜学経験者の「語り」を用いて描き出しているところに本書の特徴がある。夜学経験者についての当時の資料や記録もほとんど残っていないなか、64名の調査対象者を探し出したことには大変な苦労と時間が費やされており、並々ならぬ努力がうかがえる力作である。

著者は、夜学経験者のオーラル・ヒストリーをもとに、夜学の実相として、次の五点を新たに見出している。第一に、夜学で学んだ人たちは「必ずしも受け身ではなく、自らのニーズによって夜学に通い続けるかどうかを決めた主体的・能動的な存在」(p.336)であった。第二に、夜学は「教育欲求を満たす教育の場にとどまらず、行事やイベントを通じて、地域住民が集い、新しい文化に接することができる場、住民の団結のための求心的な役割や民衆文化創出の場」(p.338)であった。第三に、当時の女性にとっての夜学は「最もアクセスしやすい教育施設であり、学び場でもあったが、同時に家事労働等から逃れ、友達と遊んだり、新しい文化にも接することのできた「憩いの場」であり、社会とつながる窓」(p.339)であった。第四に、「植民地末期における被植民者としての夜学教師の内的葛藤や苦悩、工夫」(p.340)である。第五に、「就職や転職のために日本語を学ぼうとする者向けの営利目的の夜学が存在していた」(p.341)ことである。

このように、実際に夜学で学んだ、もしくは教えた側からの視点から植民地期朝鮮における夜学の具体的な実態を明らかにした点に本書の意義がある。著者も言及しているよう

に、高齢となった夜学経験者の証言の正確性といった点に課題はあるかも知れないが、本書で取り上げられた64名の証言は、韓国における文解（識字）教育の歴史と変遷、夜学運動史における民衆教育実践を検証していく上で貴重な史料となるであろう。